
白夜叉再臨

朝露詩奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜叉再臨

【Nコード】

N9221Z

【作者名】

朝露詩奈

【あらすじ】

佐幕とか攘夷とか、しみつたれた武士道になんて興味ない。ただ、己の守るもののために刀を振るうのみ。かつての白夜叉としての自分を封じ込め、万事屋として呑気に働く銀時が、再度白夜叉が刀を振るうとき、地球はどうなる？

「ある依頼人」がきっかけで、再び白夜叉として戦うことを決意した銀時。そんな彼を巻き込む、大事件とは。

白夜叉再臨篇、開幕！

第零訓 白夜又降誕（前書き）

まずは、お決まりのあのシーンからどうぞ。

第零訓 白夜叉降誕

冷たい雨が、2人の男の背に突き刺さる。

不吉な厚い雲で覆われた空は太陽がとうに姿を消し、あたりを灰色で埋め尽くしていた。

「はあ……はあ……はあ……」

長い黒髪の男が、刀に寄りかかるように座り込んだ。それに続いてもう1人も、彼に背を向け、膝をつく。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸はなかなかおさまらない。

頭から出ている血が頬を伝い、口に流れ込む。生臭い鉄の味が、口の中に広がった。

彼は顔をぐいっと上げ、薄闇にかすむ視界の向こうを睨んだ。無数の、赤く妖しい光が、四方八方から彼を睨み返してくる。

みな、敵の目だ。

「……これまでか」

八方塞がり。逃げ道はない。

「敵の手にかかるより、最後は武士らしく、潔く腹を切ろう」

観念して、彼は刀を抜いた。いままで、幾人もの敵から彼を守ってきた、ぼろぼろの愛刀だ。彼はその柄を両手にしっかりと持って、腹に向けた。

しかし、いざ、と刃を押し込もうとしたとき　もう一人の男が、すつくと立ち上がった。

「バカ言ってるじゃねーよ。立て」

その男は刀を抜き、大胆にも、立ちはだかる敵に向かってずかずかと歩いていく。

「美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか」

低く小さく、しかし確実に大きな決意を秘めているその言葉に、心が揺さぶられた。

自分の腹に突き刺そうとしていた刀を、目の前の敵に向かってかざしながら、立ち上がる。

2人、背中合わせになった。

「行くぜ、ツラ」

「ツラじゃない、桂だ」

短くその言葉を交わしたあと、彼らは互いには目もくれず、ただ友の背中を信じて……まっすぐに、敵中に突っ込んでいった。

その男、銀色の髪に血を浴び。

長髪の男、桂は当時の戦友のことを、そう振り返る。

戦場を駆る姿は、まさしく夜叉。

第零訓 白夜又降誕（後書き）

大丈夫なのか、自分。

受験の時期に、なぜこんなことを！？

えーと、普段は沖神専門の私が、頑張って劇場版を意識した話を書こうと決意しました。

更新は遅くなると思いますが、どうか付き合ってくださいませ。

第一訓 美人ってただ立ってるだけでいいよね(1)(前書き)

さて、と。

最初の辺はやっぱりギャグありで、それからだんだんシリアスに…
…が銀魂スタイルですよ。多分。

よし書いて。

第一訓 美人ってただ立ってるだけでいいよね(1)

はじめと雨が降る、インディペンデンスデーの朝。

「おはようございませーす」

万事屋の従業員　　というと聞こえはいいが、実際はただの雑用・ツッコミ役以外の何でもない物悲しい少年、志村新八は今日も元気に出勤する。

「おー、新八か。入れ入れー」

朝っぱらから低すぎるテンションと低すぎるノリで、苺牛乳のストローを加えながら手招きする銀時。その隣では、神楽が酢昆布をくっちやくっちやと噛みしめている。

「いや…あのさ、苺牛乳と酢昆布の匂いが混ざって、空気がすごいよどんでるんですけど…」

「気にしないのが一番ネ、新八。これが万事屋のアロマアル」

「うん、違うからね。こんなアロマが充満してたら、誰も来ないから」

新八は一通り突っ込んでから、ソファに座り、茶を入れた。

「それで銀さん、来月の生活費どうするんですか？このまま依頼来

なかつたら、食べてけませんよ」

彼は銀時に声をかける。

すでに五月も下旬、であるにもかかわらず、今月の収入はゼロ。家賃すら払えないかもしれないのに、銀時と神楽に緊張感というものはほとんど見受けられない。

「大丈夫ネ。世の中、みんな何とかできるようになってるアル」

「そーだぜ新八。今までだってなんだかんだ言いながら乗り切ってきたじゃねーか、この漫画も。何度打ち切りの危機に陥ってきたとか」

言いながら銀時は、ごろんとソファに横たわる。ますます不安を募らせる新八。

「てか、その打ち切りの危機を脱することができたのは編集部の努力のおかげですからね！アンタら何も努力してないじゃないですか！これじゃあ、いつまでたっても貧乏暮らしですよ」

しかし銀時は、いつものことながら、新八の忠告をさらっと無視。

「あーあ、何か面白いことねーかなー。例えばよ、オメー。玄関開けたら裸の美女が立ってたりとかしたら、一発……」
「その前に、アンタの頭を一発殴りたいですネ」

新八は冷ややかに言い放った後、酢昆布の空き箱で巨大な城を作っている神楽に向き直った。

「それと神楽ちゃんも！酢昆布だって、いくら単価が安いつたって、そんなたくさん買ったら大赤字だからね！空き箱だけで要塞できてるし！」

「ふうっふうっふう。悪の帝王の孫娘の婿のいとこの飼ってる犬のおもちやになってるダメガネをやつつけるには、これくらいの設備が必要ネ。覚悟するアル新八イイ！！！」

神楽が傘を掲げ、「突撃！」と叫ぶ。すると即座に、定春がキバをむいて新八に突進してきた。

「ぎゃあああああ！！！」

定春に噛みつかれた新八は、頭部から血を流しながら断末魔。やつとの思いで巨大犬を振り払い、「どんだけ大掛かりなボケかましてんの神楽ちゃん！」と声を荒げるが、神楽はへらへらと笑っている。

「駄目だ…こんなんじゃ、来月はホントに飢え死にだ…」

げっそりする新八。その横で、銀時もさすがに思いつめた顔をしている。ああ、やつと真剣になってくれたか…と新八は思ったが、

「やっぱなー…こつ、シチュエーションとしては、全裸のなまめか

しい女がこっ…」

などという銀時のつばやきを聞いて、余計に深いため息をついた。

その時。

ピンポーン、と軽いチャイムの音が響いた。

「ん？…カモが来たか」

待ってましたとばかり、銀時は起き上がっていそいそと玄関に向かう。

「いや、来客のことをカモだなんてそんな」

いい加減にしてくださいよと言おうとした新八は、しかし言葉が途切れてしまった。

銀時が開けたドアの向こう…そこには、ほぼ全裸でタオルだけをおった若い女が立っていたのだ。全身びしょぬれで傷だらけ。肩まである茶髪からは、血の混じった水が滴っている。

沈黙の時間が流れた。

そして時計の秒針が一周半ほどしたとき、銀時がついに静寂を破った。

「あのー……そういうプレイならどこかよそでどうぞ」

「ってオイイイイイ！……違うでしょ、なにかよっぽどあったんですよ！事件とか！」

新八が顔を赤くしたままあわてるが、銀時はただ鼻をほじっている。

「あー、そういうアレか、あの、初めてのピーが無駄に痛くてベッドを転がりまわったっていう……」

「傷だらけになるベッドってどんなの!？」

「きつと、切りたての丸太でできたやつアルよ」

「どこの民族？」

新八は、同僚が次々にボケを連発していることに罪悪感を感じつつ、おずおずと女を見た。

残りの2人も、とりあえずは落ち着きを取り戻す。

そして次の瞬間　女が突然、どこに忍ばせていたのか、包丁を取り出した。

「……!!」

第一訓 美人ってただ立ってるだけでいいよね(1)(後書き)

この調子で行ったら、完結までに100話突破しそうで怖いです。

でも大丈夫…なんとかなるさ。きっと……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9221z/>

白夜叉再臨

2011年12月29日13時55分発行